

## 聖なる茨の奇跡をたたえるポール・ロワイヤル修道院の奉献画

著者	菊地 章太
著者別名	Kikuchi Noritaka
雑誌名	ライフデザイン学研究
号	12
ページ	121-137
発行年	2017-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008645/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008645/</a>

# 聖なる茨の奇跡をたたえるポール・ロワイヤル 修道院の奉獻画

Les ex-voto dédiés à l'abbaye de Port-Royal  
à la louange du miracle de la Sainte-Épine

菊 地 章 太  
KIKUCHI Noritaka

## 要旨

かつてパリのポール・ロワイヤル修道院には3枚の奉獻画が伝えられていた。いずれも修道院にあった聖なる茨の奇跡をたたえる作品である。神の恩寵によって修道女らの難病が快癒した。その感謝のしるしとして修道院に奉獻されたものである。本稿は、これらの奉獻画のもとになった茨の奇跡の出現の経過をたどりつつ、その背景にあるカトリック教会の神学と17世紀フランス文化史の諸相について考察を試みるものである。

第1の奇跡は1656年に起きた。修道院附属学校にいたマルグリット・ペリエは涙腺炎に苦しんでいたが、聖なる茨にふれたことで快癒した。マルグリットはパスカルの姪である。パスカルはこの奇跡を契機として神学書の執筆にとりかかる。それは完成にいたらず思索の断片<sup>パンセ</sup>だけがのこされた。これが私たちの知る『パンセ』である。ポール・ロワイヤル修道院を誹謗するパリのイエズス会に対し、奇跡の意味を問いただそうとしたことがその出発点となったのである。

第2の奇跡は1662年に起きた。修道女カトリーヌ・ド・サント・シュザンヌは半身不随であったが、茨の奇跡によって快癒した。シュザンヌはフランス古典主義美術を代表する画家フィリップ・ド・シャンパーニュの娘である。画家の手になる奉獻画には、娘のかたわらで快癒を祈る修道院長に神の啓示がもたらされた瞬間が描かれている。これが現在ルーヴル美術館に所蔵されるシャンパーニュの代表作「1662年の奉獻画」にほかならない。

第3の奇跡は1667年に起きた。修道女見習のクロード・ボードランは胃の腫瘍に冒されていたが、これまた茨の奇跡によって快癒した。それをたたえる奉獻画は現在、マルグリットのそれとともにパリ郊外のリナス聖堂の所蔵となっている。2枚の奉獻画は本来は対になっていたものと考えられる。最初の奇跡から11年をへて、なお神の恩寵はくだされつづけた。しかしポール・ロワイヤル修道院に対するイエズス会の攻撃はやむことがなく、教皇庁とフランスの官憲を巻き込んだあげく、ついに修道院は地上から姿を消すに至った。修道女らを救った奇跡のあかしは3枚の奉獻画にのこるだけとなったのである。

キーワード：カトリック神学 フランス ポール・ロワイヤル修道院 パスカル フィリップ・ド・シャンパーニュ

## 1. 大いなる恩寵のあかし

かつてフランドルと呼ばれた現在のベルギーに生まれ、パリで生涯を終えた画家フィリップ・ド・シャンパーニュPhilippe de Champaigneが娘の所属する修道院に納めた絵がある。「1662年の奉獻画」Ex-voto de 1662と呼ばれるその作品は、現在はパリのルーヴル美術館に所蔵されている [図1]。画家の娘カトリーヌ・ド・サント・シュザンヌCatherine de Sainte-Suzanneが奇跡によって病から癒えた。その快復を記念し、神がくだされた恩寵に感謝して制作された作品である。カトリーヌが本名、サント・シュザンヌは修道名である（以下、シュザンヌと呼ぶ）。

描かれている場所はパリのポール・ロワイヤルPort-Royal修道院の一室である。腰かけているのがシュザンヌで、麻痺した脚を台にのせている。手もとに小箱があり、奇跡を起こす聖なる茨が収めてある。かたわらで祈っているのは修道院長カトリーヌ・アニェス・ド・サン・ポールCatherine Agnès de Saint-Paulである（アニェス・アルノーAgnès Arnauld と通称された。ここではアニェスと呼ぶ）。天上から光がさしてアニェスを照らしている。光はシュザンヌの脚にもそそがれる。快復を予告する神の啓示がアニェスにくだされた瞬間である。まだ奇跡は起きていない。1年以上におよぶ病でシュザンヌの顔は青白い。だが、さしこむ光に向けたまなざしには輝きがある。啓示のよろこびを静かにかみしめるかのようなようである。

画面の左上にラテン語の銘文がある。「魂と体の唯一の医師であるキリストに」という標題の下に、次のように記されている。「修道女カトリーヌ・シュザンヌ・ド・シャンパーニュは、熱病が14カ月のあいだおさまらず、その症状は重くなるばかりで、半身がほとんど麻痺して気力は涸れはて、医師たちもあきらめかけていたが、彼女の祈りが修道院長カトリーヌ・アニェスの祈りとひとつになった瞬間、神から健康な体が改めてあたえられ、今もそうありつづけている。フィリップ・ド・シャンパーニュは、かくも大いなる奇跡とそのよろこびのあかしとしてこれを絵にした。1662年」とある<sup>(1)</sup>。

シュザンヌ、本名カトリーヌは1636年にパリで生まれた。12歳のときポール・ロワイヤル附属学校の寄宿生となり、21歳で修道請願を立てて修道女となる。それから3年後の1660年の秋、両脚の麻痺からはじまって半身不随になってしまう。快復を願う修道女たちの祈りがつづけられた。ノヴェナと呼ばれる9日間の連続祈禱の最後の日に、アニェス修道院長は神の啓示を受けた。シュザンヌは奇跡によって病から解放されたのである。1662年1月7日のことだった。

父親のフィリップ・ド・シャンパーニュは1602年の生まれである。生地はフランドルで画業に就いたのち、1621年にパリに来てニコラ・プッサンと知りあう。のちにフランス古典主義美術を代表する画家となるふたりは、ともどもリュクサンブール宮殿の装飾にたずさわった。シャンパーニュは総監督ニコラ・デュシェーヌの娘婿となり、そのはからいで国王の母マリー・ド・メディシスや宰相リシュリューの知遇を得た。宮殿装飾や肖像画の制作に従事し、1648年には王立絵画彫刻アカデミーの設立にも加わっている。

シャンパーニュの作品は厳格なまでの写実描写が特徴である。構図は簡潔で色彩は冷たいまでに澄んでいる。40代のなかごろから、ジャンセニズムと呼ばれるキリスト教思想に共鳴しだした。ポール・ロワイヤル修道院がその本拠地である。禁欲的な世界にふれることで、その感覚はいよいよ研ぎ澄まされていく。色彩は抑制され、古典的な荘重さが画面にあふれてきた。「1662年の奉獻画」はそ



〔図1〕シャンパーニュ「1662年の奉献画」ルーヴル美術館（Musée national des Granges de Port-Royal, *Philippe de Champaigne et Port-Royal*, Éditions de la Réunion des musées nationaux, Paris, 1995）

の典型にはかならない。

この作品は修道院に奉献されたあと、パリの南西にあるポール・ロワイヤルの別院に移された。のちに修道院が破壊されたため、パリ市内セーヌ左岸のプティ・ゾギュスタン修道院に収蔵された。ここはあいつぐ市民革命で押収された美術品の保管庫になっていた。ルーヴル美術館の1824年のカタログに記載があるから、それ以前に搬入されたことは確実である<sup>(2)</sup>。

シュザンヌの奇跡の快復は、手もとの小箱のなかの聖なる茨によって実現した。この恵みに最初にあずかったのは同じ修道院にいたマルグリット・ペリエ Marguerite Périer である。かのパスカルの姪にあたる。そのころパスカルはパリのイエズス会士らと論戦のさなかにあった。そこにふってわいたように起きたこの奇跡によって、彼の心に光がさした。それが『パンセ』の名で呼ばれる未刊の書物の出発点となっていく。

## 2. 胸につけた赤い十字架

ポール・ロワイヤル修道院の創設は13世紀にさかのぼる。パリからヴェルサイユに向かい、さらに南西にくだるとシュヴルーズの谷にいたる。そこにシトー会の女子修道院が設立された。宗教改革をへたカトリック教会は1545年から63年までトレント公会議を開催し、プロテスタントの脅威に対して



巻き返しをはかった。教会自体の立て直しも目標とされ、17世紀にはフランスで信仰復興の動きがさかんになる。ポール・ロワイヤルにおいても修道院長アンジェリック・アルノー Angélique Arnauld (アニェスの姉) による改革がはじまった<sup>(3)</sup>。

修道院は谷間の湿地にあって環境はあまりよくない。1625年にアンジェリックはパリ市内の館を買収して修道女らと移り住んだ。リュクサンブール公園の南、サン・ジャック通りとポール・ロワイヤル大通りが交差する場所である。その後シュヴルーズの方は周辺の環境が整備されたため、1648年にアンジェリックは数人の修道女を連れてもとの修道院にもどった。このときからポール・ロワイヤルはパリとシュヴルーズのふたつに分かれることになった。

同じ年に修道女らによる「聖なる秘跡の教団」l'ordre du Saint-Sacrement が認可された。それまでのシトー会の黒服から白い修道服に替え、肩から胸に掛けるスカブラリオに大きな赤い十字架をしるした。シャンパーニュの絵でふたりの修道女がまとっているのがそれである。この教団の名である「秘跡」とは具体的に何をさすのか。

カトリック教会ではラテン語のサクラメントゥム sacramentum を訳して秘跡と呼ぶ。秘められたしるしのことである。「目に見えない恵みの、見えるしるし」と定義されている<sup>(4)</sup>。教会には洗礼をはじめとする七つの秘跡があるが、ここでは聖体の秘跡をさしている。ミサにおいてパンとぶどう酒が祝福されて聖なるものとなる。このときパンとぶどう酒がキリストの体と血に変化すると教会では考える。この変化したものを聖体と呼ぶ。信者は神に礼拝するように聖体に礼拝する。そして聖体であるパンを食べ、ぶどう酒を飲む。こうして聖体をいただくことを教会では聖体拝領と呼んできた。現在この儀式は「感謝の祭儀」と呼ばれる。もとの言葉はコムニオ communio という。それは「ひとつになること」を意味する。

キリストの体をいただくことによりキリストとひとつになり、キリストとひとつになった者同士がそこでひとつになる。今もカトリック教会では日曜日のミサで信者が聖体を拝領する。その原点はここにある。

宗教改革のなかでプロテスタントの一部はこの聖体の教えに意義をとなえた。対抗宗教改革の第一歩となったトレント公会議では、改めて聖体におけるキリストの実在が確認される。1551年に公布された『聖なる秘跡についての教令』*Decretum de sacrosancta Eucharistia*によれば、パンとぶどう酒に祝福があたえられたのち、「まことの神であり人である私たちの主イエス・キリストが、真に、現実、実体として、パンとぶどう酒の姿のもとに現存する」という<sup>(5)</sup>。聖体にキリストが現存するのである。こうした信仰は古代から一貫してあった。しかしプロテスタントの一部がそれを疑問視したことから、カトリック教会が当時の神学者を総動員してその教義を再確認した。伝統の否定を契機として、かえってこれを強力に宣揚するにいたった。

アンジェリックの弟のアントワヌ・アルノー Antoine Arnauld は、神学者としてポール・ロワイヤルの活動を指導した。プロテスタントに対して聖体の教義を重んじるカトリックの立場を堅持してきた。修道女らの「聖なる秘跡の教団」もここに基礎を置いている。そして赤い十字架のしるしもそのときからはじまったのである。

プロテスタントが攻撃したものをカトリックは擁護する。以前にも増して重んじられるようになったものも少なくない。聖体の教義はそのひとつである。聖母や聖者の崇敬も同様であり、聖遺物

reliquiae の崇敬にもそれはあてはまる。シュザンヌにもたらされた奇跡はこの聖遺物崇敬にもとづいていた。聖遺物はキリストの受難にかかわる遺品、あるいは聖者の遺体や生前に身につけていたものをいう。ヨーロッパの聖堂にはおびただしい数の聖遺物が祀られている。それはもとより物質にすぎない。プロテスタントの格好の攻撃目標となったのも当然であろう。

1563年にトレント公会議において公布された教令は、「聖遺物を尊重し、聖者の画像を正しく用いることを信者に教えるように」命じている<sup>(6)</sup>。それを通じて「多くの恵みが神から人にあたえられる」からである。この教令は教会において遵守されてきた。1963年に第2ヴァチカン公会議で公布された『聖なる典礼に関する憲章』*Constitutio de sacra liturgica Sacrosanctum Concilium*においても、聖者の「真正な聖遺物とその画像は崇敬される対象となる」と定められている<sup>(7)</sup>。

シャンパーニュの奉献画の出発点は、パリのポール・ロワイヤル修道院に伝えられた聖なる茨 corona spinarum という聖遺物だった。キリストが十字架にかけられるまえに、ローマの兵士たちは「茨で冠を編んで頭にかぶせた」という。新約聖書「マタイによる福音書」(27-29)に記されている<sup>(8)</sup>。13世紀に十字軍を組織したフランス王ルイ9世が、この茨の冠を聖地より持ち帰ったとされる。このほかキリストの受難にちなむさまざまな聖遺物を安置するため、パリのシテ島にサント・シャベル礼拝堂が建立された。茨の冠といえはこの礼拝堂のものが名高いが、茨の一部とされるものはいくつもある。ポール・ロワイヤルの聖遺物もそのひとつだった。

### 3. 茨の奇跡がはじまる

聖なる茨の奇跡は1656年に起きている<sup>(9)</sup>。

パスカルの姉のジルベルトGilberte Pascallはクレルモンの判事フローラン・ペリエFlorin Périerと結婚した。クレルモンはパスカルの生地である。フランス中部のオーベルニュ地方の町で、現在はクレルモン・フェランと呼ばれる。ペリエ夫妻の娘がマルグリットである。夫妻はわが子を神にささげようと心に決めていた。マルグリットは10歳のとき、母に連れられてパリのポール・ロワイヤル修道院をおとずれた。そして修道院附属学校の寄宿生となった。パスカルの妹のジャックリーヌJacqueline Pascalもそこの修道女になっている。マルグリットにとっては叔母にあたる。叔父であるパスカルはその後見人として姪を見守りつづけた。

マルグリットは涙腺炎をわずらっていた。左眼のふちに腫れものができ、たえず膿が出る。医師は手術する以外に治癒の見込みはないという。麻酔のない時代である。両親はそこまでふみきる決心ができずにいた。症状は悪化するばかりである。眼のふちが腫れあがって、しこりができた。膿が眼から流れ出し、このままでは失明してしまう。マルグリットは夜も眠れずに苦しみつづけた。クレルモンの両親のもとに手紙が届けられ、すぐにパリに来るよう告げられた。

修道院に聖なる茨の一片が安置されている。金曜日の午後3時、キリストが十字架の上で息絶えたその時刻に、修道女らは聖歌をうたいながら、ひとりずつ順番に聖遺物のまえでひざまづいて祈る。マルグリットの番が来たとき、年上の修道女が聖遺物を手にとってマルグリットの眼にふれさせた。3月24日のことだった。

夜になってマルグリットは眼のようすがいつもと違うことに気づいた。しこりは消え、押しても膿

は出ない。すぐにアニェス修道院長に報告された。翌朝、叔母のジャックリーヌにもそのことが告げられる。5日後の29日、パスカルも修道院にかけつけ、マルグリットに会った。眼はすっかりよくなっている。かかりつけの医師が診察して快癒していることを認めた。4月はじめにパリに着いた父親のフローランは、パスカルの家で娘の快癒の話を聞いた。パリ市内の名のある医師に調査が依頼される。自然の力をこえたものの働きによると医師は判断し、それを文書に記して署名した。

奇跡のうわさはたちまちにひろまった。聖なる茨を礼拝しようと修道院をおとずれる人があとをたない。秋になるとパリ大司教代理が修道院に出向いた。マルグリット本人はもとより、父親と叔父のパスカル、修道女らにも証言を求めた。神学博士によって構成された委員会がこれを検討した結果、奇跡の治癒であることが教会から正式に認められ、大司教代理の名でその宣言書が交付された。日付は10月21日である。奇跡をたたえるミサがポール・ロワイヤル修道院でおこなわれた。宣言書はこのとき信者に配布するために印刷された。パスカルもそれを受け取っている。

この奇跡は修道院の人々を勇気づけた。ポール・ロワイヤルがイエズス会の攻撃にさらされていたさなかのできごとだった。その次第を語るには、修道院の人々がよりどころとしたジャンセニズムについてふれる必要がある。

#### 4. ポール・ロワイヤルの危機

ジャンセニズムはオランダの神学者コルネリウス・ヤンセンCornelius Jansen の名にもとづく。ヤンセンのラテン語表記ヤンセニウスを教会ラテン語でジャンセニウスと発音する。その教えを奉じる人々をフランス語でジャンセニスト、彼らの思想をジャンセニズムと呼んだ。ヤンセンは1585年に生まれ、ルーヴェン大学で学んだ。カトリック神学の伝統をほこる大学で、現在はベルギーに含まれる。そこで司祭となり聖書学の教授となった。ヤンセンはラテン教父アウグスティヌスの教えを重んじた。そのなかでとくに重要なのは人の自由な意志と神の恩寵に関する教えである。

人はみずから努力して救いに到達できるか否かという問題がある。アウグスティヌスはそれはできないと考えた。最初の人間であるアダムとイヴは罪を犯した。その末裔である私たちは罪を負って生きている。罪にまみれた私たちは神の特別な恩寵によらなければ救われることはないという。この自由意志と恩寵の問題は宗教改革において最大の論点のひとつとなった。救いは神が一方的にあたえる賜物であるとルターは考えた。人の主体性が救いに関与することはないという。これを神の側から見れば、救いは「恩寵のみ」によるのであり、人の側から見れば「信仰のみ」によって救いは確信されることになる。ヤンセンによるアウグスティヌスの理解はルターのそれに近いところがあった。遺著である『アウグスティヌス』全3巻は1640年に出版されている。これを最初に批判したのはルーヴェンのイエズス会だった。イエズス会は自由意志を尊重する。ローマ教皇に絶対の忠誠を誓う会としては当然の姿勢であろう。

ヤンセンの『アウグスティヌス』から抜き出された「五つの命題」に異端の嫌疑がかけられた。ソルボンヌでその検討がはじまる。ソルボンヌとは当時のパリ大学神学部である。ポール・ロワイヤルの修道院長アンジェリックの弟アルノーはソルボンヌの教授であった。彼の周囲にはヤンセンの教えを支持する人もいた。この問題は結着がつかず、教皇庁の判断をあおぐことになる。教皇インノケン

ティウス10世は「五つの命題」を異端とする勅書「クオ・オカジオーネ」*Cuo occasione*を1653年に公布した。

アルノーは「五つの命題」が異端であることは認める。しかしヤンセンの著書にその命題と同じ文章はないと主張した。これはいったんくだされた教皇の決定に異をとねえことになる。その主張は断固しりぞけられ、アルノーは激しい非難にさらされた。さらに彼の指導のもとにあったポール・ロワイヤルまで渦中にまきこまれたのである。

ここには神学上の問題だけでなく、ほかにさまざまな要素がからんでいた。フランスにはガリカニズムという言葉がある。ローマ時代に現在のフランスの一部をガリアと呼んだ。それが言葉のもとである。フランスはカトリックの国だが、国はもとより教会もつねにローマ教皇庁とは距離を保とうとしてきた。政治も宗教も自律的であろうとする。こうした姿勢をガリカニズムという。いわばフランス教会独立主義である。

ヤンセン批判はルーヴァンからはじまった。しかし論争が激化したのはパリにおいてである。ジャンセニズムが形成されたのも、ヤンセンのひざもとではなくフランスであった。ジャンセニズムの思想にみちびかれたポール・ロワイヤル修道院は、堅実な信仰のいとなみによって世人の尊敬を集めていた。その附属学校も先進的な教育理念において定評があった。フランス古典演劇を代表するラシーヌもそこで学んだひとりである。

そのポール・ロワイヤルがイエズス会の策動で危機にさらされようとしていた。国王は絶対王制の確立をめざすルイ14世だが、その聴罪司祭はイエズス会士である。会は俄然強気であった。アルノーのもとに集まった人々が対策を協議した。パスカルもそこにいた。市民の良識にうったえるほかない。イエズス会への反論をアルノーが起草したが、脱稿したものはまるで神学論文である。これでは世論を味方にできない。一同の目が若いパスカルにそそがれた。

パスカルは難解な神学上の議論を日常の言葉でわかりやすく伝えようと考えた。いなかの親しい友人に今パリで起きていることを書き送る。そうした体裁で反論文書『プロヴァンシアル』*les Provinciales*はスタートした。タイトルは「いなかの人」という意味である。開口一番「ぼくたちはすっかりだまされていた」とはじまる。ソルボンヌで議論が起きているというから、信仰の大問題でも出てきたかと思いきや大違いである。やり玉にあげられている「五つの命題」がもとの本にあるかどうかは、読んでみればわかることではないか。ソルボンヌに伺いをたてるまでもない。ありもしないものをでっちあげて人をおとしめているだけではないかという。

アルノーを攻撃するやからは「近接する能力」という意味不明な言葉を使う。義人は律法を遵守する「近接する能力」を有するなどと語りあっている。意味は人によって千差万別だが、それはどうでもよい。同じ言葉を使うことで「あたかも一大勢力ができているかのように見せかけ、数にものを言わせてアルノーを強引に抑えこもうとする」とパスカルは記した<sup>(10)</sup>。

それからほどなくして『プロヴァンシアル』の続編が世に出た。1年2カ月のあいだに18通も発行されている。途中から非合法出版である。パリ市民は競うようにして読んだという。そうした評判にもかかわらず、ポール・ロワイヤルをめぐる形勢は徐々に不利になっていった。附属学校が閉鎖を命じられた。そのさなかにあの奇跡が起きたのである。神の恩寵がくだされた修道院にふたたび人々の心はひかれていく。



## 5. 神からそそがれた光のなかで

奇跡の治癒にあずかったマルグリットの父母は、ジャンセニストの画家フランソワ・ケネル François Quesnelに奉献画の制作を依頼した。こちらは「1656年の奉献画」と呼ばれ、現在はリナスのサン・メリ聖堂にある [図2]。パリの南、シュヴルーズの東の町である。おそらくシャンパーニュの奉献画と同じく、パリからシュヴルーズに移されていたのだろう。

聖なる茨をまつる祭壇のまえでマルグリットがひざまずいている。左の眼はすっかりきれいになった。澄んだひとみでじっと奇跡の茨を見つめている。あどけないほどに清らかな顔だちが印象的である。修練者の白服に身をつつんでいる。修道誓願を立てるまえの準備期間中にある者をこう呼ぶのである。

画面の下にラテン語の銘文がある。「救い主キリストに」とあって次のようにつづく。「10歳になるマルグリット・ペリエは、左の眼にできた厭うべき腫れもののために3年のあいだ苦しんでいたが、命をもたらす茨にふれて瞬時に癒えた。1656年3月24日のことである。彼女の両親による大いなる感謝の思い出としてこの絵をささげる」と<sup>(11)</sup>。

マルグリットに神の恩寵がくだされたあと、聖なる茨はなおも奇跡を起こしつづけた。ポール・ロワイヤルは12件の奇跡を公表した。修道院以外の場所でも茨にふれたものを通じてあいついで奇跡があらわれた。パリ北西のポントワーズの町に聖ウルスラ会の修道院がある。修道女マリー・ド・ラソ



〔図3〕 シャンパーニュ工房「1667年の奉献画」リナス、サン・メリ聖堂 (Lesaulnier, *op. cit.*)



〔図2〕 ケネル「1656年の奉献画」リナス、サン・メリ聖堂 (Jean Lesaulnier et al., *Dictionnaire de Port-Royal*, Honoré Champion, Paris 2004)

ンプシオンは8カ月近くひどい頭痛になやまされていた。ポール・ロワイヤルで起きた奇跡の話聞き、8月17日にリンネルの布を送って聖遺物にふれさせてもらった。もどってきた布を患部にあてると、その日を境に痛みがなくなったという。聖ウルスラ会は医師の署名入りの証明書を作成してポール・ロワイヤルに送ってきたのである。

このポイントワーズの奇跡のことはパスカルも聞いていた。後述するシャルロットに宛てた手紙でそれを伝えている。「聖なる茨の信仰によって、修道院から一歩も出ることなく、ひどい頭痛から癒されたそうです」とパスカルは記した<sup>(12)</sup>。聖なる茨の奇跡はイエズス会の攻撃にさらされていたポール・ロワイヤルの人々に勇気をあたえた。もっとも強くそれを感じたのは、あるいはパスカルだったかもしれない。

姉のジルベルトは回想している。「弟はこの恩寵に強い感銘を受け、それが自分自身にあたえられたものであるかのように考えた」と。洗礼のとき代父をつとめた娘に恩寵がくだされたのだから、その思いもひとしおだったという。さらに姉は記した。「世のなかのほとんどの人の心から信仰が消えてしまったかに思える時代に、こんなにもあきらかに神がみずからをあらわされたのをまのあたりにして、弟はどんなにか慰められたことでしょう」と<sup>(13)</sup>。

『プロヴァンシアル』が書きつがれていたところである。この文書が市井の人々の共感を呼び起こしたことはまちがいない。そうなればなおのこと相手は権威をかさに攻撃をしかけてくる。それは苦しい戦いだったはずである。この戦いを神がよしとされ、そのしるしをあらわしたもうた。その信念がパスカルの心を奮い立たせたのだった。

数年後に姉のジルベルトはパスカルの死をみとり、その生涯の思い出をつづった。それがこの回想である。もともと家族や友人に読んでもらうためのものだった。ジャンセニストとイエズス会士の確執もつづいていたから、出版はずっとためられていた。そのため書き写されたものが諸所に伝わり文章に異同が生じた。先ほどの引用は1845年出版の『ペリエ夫人書簡小品集』から訳した。別の写本にもとづく新しい版は、フランスで刊行されたいくつかの全集に収められている。そこには次のような文章がある。

パスカルはなにごとにつけても思いをこらしたうで熱中していく質だ<sup>たち</sup>という。このときも身近に経験した奇跡に動かされ、聖書のなかの奇跡に関する考察へと導かれていった。そして「奇跡についてさまざまに思いをめぐらせたことで、宗教に関する多くの新しい光が弟にそそがれた」という<sup>(14)</sup>。パスカルは信仰の敵に対して闘志を燃やした。神からそそがれた光のなかで、いかにして彼らを徹底的に打倒すべきかを見さだめ、そして「あの著作に取りかかった」という。それを自分の手でまとめあげることはついにかなわなかった。それができたならばさぞや美しい作品になったはずだと姉は記した<sup>(15)</sup>。

## 6. 未完の神学書構想

姉ジルベルトがいう「あの著作」とは何か。それは完成しなかったのだからパスカルが心に思い描いたかたちではのこっていない。しかしその断片は伝えられている。それが私たちの知る『パンセ』にほかならない。

ひとりの少女にくだされた奇跡のなかに神のあらわれを感じたパスカルは、奇跡の意味について考察をはじめた。やがてキリスト教の真理を解きあかす著作の構想へとふくれあがっていく。しかしそれは彼の早すぎた死のために完成にはいたらず、そのための思索の断片だけがのこされた。パスカルは生前すでに物理学や幾何学の研究で名を知られていた。しかし生涯の最後の時間はこの神学的著作についやされた。それが『パンセ』の出発点となったのである。

『パンセ』は彼の没後に近親者と友人によって編纂された遺稿集である。考察をかさねてきた著作の断片的な草稿を中心として、それ以外の覚え書きもくわえられた。1670年に出版されたときのタイトルは、『没後に書類のなかから発見された宗教およびほかのいくつかのテーマに関するパスカル氏の思索』*Pensées de M. Pascal sur la religion et sur quelques autres sujets, qui ont été trouvées après sa mort parmi ses papiers*という。めざしたのはもちろん思索の寄せ集めではなく、確固たる構成をそなえた作品であったはずである。『プロヴァンシアル』で実現させたように平明な表現のなかにも説得力にあふれた論述が展開されたであろう。市井の人々の心にとどく神学書が世にあらわれることになったかもしれない。

しかし実際にのこされたのは未完成の文章ばかりである。フランスでは最初の出版以来、多くの学者がそれぞれの観点から断片を選択して配列しなおし、パスカルの意図したものに迫ろうとしてきた。結果としてさまざまな形態の『パンセ』が私たちのまえに置かれることになった。その書物をひもといてみれば、そこには人間の洞察があり人生の知恵がある。その範囲はきわめて広いが、たとえばモンテーニュの『エッセー』とくらべたとき、あまりに宗教に関する項目が多彩なのにおどろかされる。それは著作の本来の意図からすればむしろ当然であって、とりわけ奇跡に関する部分は充実している。そもそもの出発点がポール・ロワイヤルにおける聖なる茨の奇跡だったのだから。

イエズス会の理不尽な主張に対し、はてのない論戦にあけていたとき、パスカルはこの奇跡に遭遇した。『パンセ』のなかに「奇跡について」と記された次のような文章がある。「神がこんなにしあわせにしてくださった家族はほかにない。それだから、こんなに神への感謝にあふれた家族もほかにないということを心にとめてほしい」と<sup>(16)</sup>。

これはマルグリットの身に奇跡が起きた直後に書きとめられた文章と考えられている。家族というのはマルグリット親子だけでなく、同じ修道院で暮らす妹のジャックリーヌも、代父であるパスカルも含めた一族の人すべてであろう。これほどのおどろきと、そしてよろこびが彼らにおとずれようとは思ってもよらなかったのか。この文章はまるで祈りのようである。パスカルは理性をこえた奇跡という現象に遭遇した。そこから先はジルベルトの回想にあるとおり、思いをこらしたうえで奇跡の考察に入っていた。

パリのイエズス会はこの家族のしあわせに対してさえ容赦なく批判をくわえてきた。教会に敵対するジャンセニストのともがらに神が真実の奇跡など起こすはずはないというのだ。マルグリットの眼がいやされたのは、神がまちがった者たちの眼を開かせるためにしたのだと言ってきた。パスカルは言う。「奇跡が教えを見分けさせ、教えが奇跡を見分けさせる」と<sup>(17)</sup>。何が正しい教えなのか。それは真実の奇跡が見分けさせてくれる。ポール・ロワイヤルに起きた奇跡が真実のものであったなら、修道院の人々が信頼するジャンセニストの教えも真実の教えにほかならない。パスカルの周囲では誰もがそう確信しただろう。パスカルはさらに言う。「真の奇跡を信じようとしなないのは、愛が欠けて

いるからである」と<sup>(18)</sup>。

新約聖書「ヨハネの第一の手紙」(4-16)に言う。「神は愛である」と。愛がないとしたらそこに真実の教えはないことになる。『パンセ』の草稿には、「真の奇跡を信じさせるものは愛である」という文章もある<sup>(19)</sup>。真実の奇跡を信じるところからキリスト教ははじまるというのか。先の言葉につづけてパスカルは記した。「宗教の基礎にあるもの、それは奇跡である」と<sup>(20)</sup>。

## 7. みずからを隠す神

パスカルがポントワーズの奇跡について書き送った手紙のことはまえに述べた。手紙の相手のシャルロットという女性もまた、聖なる茨にふれたひとりだった。それは大きな奇跡というわけではない。だが彼女の人生にとっては大きな意味をもつことになった。

シャルロットは母とともにポール・ロワイヤルを訪れた。聖なる茨のまえで祈っていたときのことである。彼女も眼病を病んでいた。茨に口づけしたとき、突然なにものかにふれたという感覚にとらわれた。その瞬間、世俗の暮らしを捨てて修道女になろうという思いで心がいっぱいになったという。シャルロットの眼病はなおらなかったが、そのときの思いはずっと心から消えなかった。とうとう周囲の反対をよそに修道院に駆けこんだ。しかし結局は家族の手で連れもどされてしまう。修道女になる望みはとげられなかった。のちに結婚したが、子どもたちに先立たれて一生を終えたという。

パスカルとシャルロットの出会いはおさなころまでさかのぼる。パリへ移り住んだパスカル家の住まいの近くにルアネ侯爵家の邸宅があった。侯爵家の長男アルテュスはパスカルより4歳下で、妹のシャルロットは10歳下である。アルテュス、のちのルアネ侯爵との交友は生涯にわたってつづいた。侯爵はパスカルの感化で信仰の世界へ入った。シャルロットもまたパスカルを慕いつづけたのである。ふたりのあいだには親密な手紙のやりとりがあった。みずからの信仰をうちあけ、信仰につながるよろこびと慰めとを語って、そうしてシャルロットをいたわり励ますパスカルの姿がそこにある。奇跡をめぐる彼の思索は著作としては完成しなかった。しかしシャルロットに宛てた手紙のなかに、心に染みる言葉で信仰のあかしを告げているように感じられる。

1656年に聖なる茨の奇跡がおきたその半年後、パリの大司教座から宣言書が公布されたことはすでに述べた。そのすこしあとでシャルロットに送られた手紙がある。日付は10月29日とある。公刊されているパスカルの手紙の4通目にあたる。そこにはこう記されている。神はごくわずかな人にだけ、特別なできごとを通してみずからをあらわされる。私たちはこの機会を大切にしなければならない。なぜなら、神がみずから「神秘の世界の外に出てこられた」からだという。それは私たちの信仰をもっと強いものにするためにほかならない。「私たちがもっと確かなものとして神を理解し、もっと熱意をもって神につかえさせるため」である。パスカルはシャルロットにそう語った<sup>(21)</sup>。

神はイエスという人になってこの世にあらわれた。教会はこれをインカルナティオincarnatioと呼んでいる。言葉のもとになっているカルネは肉のことである。「肉に入りこむこと」を意味し、「受肉」と訳される。これは教会の秘義である。目に見えない神が目に見える人の肉体をもった。神がみずからその姿に身をゆだね、苦しみを受けたのである。人となった神が苦しみを受けて世を去ってのち、教会のミサにおいてパンとぶどう酒のなかに神がみずからをあらわす。これがすなわち聖体の秘



跡である。そして時に奇跡をおこして人の世にそのしるしをあらわす。

パスカルが手紙のなかで語ったのは、まさしく神がこうして「外に出てこられた」ということだった。ここで彼はキリスト教の秘義にふれたのである。つづけて言う。神は受肉のときまで「自然のほとりのもとに隠れて」存在した。時がいたり、人となってこの世にくだった。そして「マタイによる福音書」(28-20)が語るとおり、「私は世の終わりまで、いつもあなた方とともにいる」と約束した。この約束をはたすために、どんな神秘にもまさる聖体という神秘のなかに隠れたのだという。

この「隠れて」存在する神という考え方は、パスカルの神学においてもっとも重要なものであろう。これこそが「神が存在することの究極の神秘」だというのである。旧約聖書「イザヤ書」(45-15)に、「イスラエルの神、救い主よ、まことにあなたはみずからを隠される神」とある。イスラエル民族が長いあいだとらわれの身であったとき、彼らの神は「みずからを隠される神」だった。しかしかならずや神はみずからをあらわす。その信仰がしいたげられた彼らをささえてきたのである。

その思いはパスカルにとってもポール・ロワイヤルの人々にとっても同じではなかったか。パスカルは手紙の終わりにこう記した。「つかのまの苦しみが永遠のしあわせを覆い隠していても、いつかはそこへみちびかれるでしょう」と<sup>(22)</sup>。隠れた神の神秘をパスカルは聖なる茨の奇跡によって直観したのである。「神を感じるのとは心である。理性ではない。これが信仰というものだ」とパスカルは主張する。そしてこの文章のあとに次の言葉がぽつんと置かれている。「理性ではなく心を感じいる神」と<sup>(23)</sup>。

## 8. さらにもうひとつの奉獻画

マルグリットの奇跡から6年後に、聖なる茨を介してシャンパーニュの娘シュザンヌに神の恩寵がくだされた。それからさらに5年がたち、ふたたびポール・ロワイヤルの修練者クロード・ボードランClaude Baudranの身に奇跡が起きた。15歳のクロードは胃の腫瘍におかされていた。医師も治療を断念するほど重い症状だったが、聖なる茨にふれて瞬時に癒えたという。このときも彼女の両親が感謝のしるしに奉獻画の制作を依頼した。これがマルグリットの奉獻画とならんでリナスに伝わる「1667年の奉獻画」である〔図3〕。シャンパーニュの工房による制作とされる<sup>(24)</sup>。マルグリットのそれとは左右対称に、まったく同じ姿勢で描かれている。ポール・ロワイヤルの礼拝堂でも左右に向きあうように置かれていたのかもしれない。

シャンパーニュの作品もふくめて、聖なる茨の奇跡をたたえる奉獻画がすくなくとも3点のこされたことになる。11年の歳月をへてなお神の恩寵がくだされつづけたのである。しかしこの間、ポール・ロワイヤルの受難もつづいた。

フランス聖職者会議は「五つの命題」を断罪する信仰宣誓書に署名することを求めてきた。これに抵抗した修道女たちは別の修道院に移され、あるいは官憲の監視のもとに置かれた。修練者クロードの奇跡はこうしたなかで起きたのである。やがてローマ教皇の勅書によって宣誓書への無条件署名が強制される。シュヴルーズにのこっていた高齢の修道女たちが拒否したため、ついに王権が介入するにいたった。1709年に修道女を離散させ、修道院を爆破して巡礼地にならないようにした。かくしてポール・ロワイヤルは地上から姿を消したのである。



〔図4〕 シャンパーニュ「修道女カトリーヌ・ド・サント・シュザンヌ」パリ、個人蔵、1662年（Musée national des Granges de Port-Royal, *op. cit.*）

シュザンヌの上半身だけを描いたシャンパーニュの習作がのこされている〔図4〕。手をあわせ、視線を上の方にそそぐ姿である。画家は最初、ふたりの修道女が十字架の両脇でひざまづいて祈る姿を描こうとしたといわれている<sup>(25)</sup>。

よろこびを胸に秘めたその表情を見ていると、パウロの言葉が思い出される。「生きているのはもはや私ではなく、キリストこそ私のなかに生きている」という。新約聖書「ガラテヤの人々への手紙」（2-19～20）に記されている。パウロはこのとき神とひとつになったのである。それは神の側からもたらされた恩寵だった。

6世紀の神秘神学者ディオニュシオス・アレオパギテースは語っている。神の愛は「愛する者が自分自身に属することをゆるさない。みずからを出て愛する者に属させる」と<sup>(26)</sup>。ここでディオニュシオスは先ほどのパウロの言葉を引いた。そこには語られたのは神との合一にほかならない。それは人の側からではなく、神の側からのほたらきによって実現する。神が人を愛するからである。人が神を愛するからではない。十字架のイエスがそうではなかったか。人々はイエスを愛さなかった。イエスは十字架にかけられた。それでもイエスは彼らを愛したのである。

ここに神の「選び」がある。「ヨハネによる福音書」（15-16）は言う。「あなた方が私を選んだのではなく、私があなた方を選んだのだ」と。それは神のはからいによる。神が選bitもうことである。

シエナの聖女カテリーナもそれを語っていた。「あなたは御自分からあたえてくださり、かなえてくださり、満たしてくださる」と。聖女の心を信仰の光で輝かすのは神である。聖女の心を炎で燃えあがらせるのも神である。さらに言う。「誰があなたにそれを強いるのでしょうか。私ではなく、ただひたすらあなたの愛がそうさせるのです」と<sup>(27)</sup>。

恩寵を待ちこがれるシュザンヌの祈りのなかで、この言葉が真実のものとなった。キリストが心のなかに生きている。パスカルという「心に感じいる神」に見出され、神とひとつになっていく。その確信が心のうちに満ちあふれてくる。美しいまなざしにやどる光が、その瞬間を伝えている。

## 注

- (1) Musée national des Granges de Port-Royal, *Philippe de Champaigne et Port-Royal*, Éditions de la Réunion des musées nationaux, Paris, 1995, p.149. “CHRISTO UNI MEDICO / ANIMARUM ET CORPUM / SOROR CATHARINA SUSANNA DE / CHAMAPIGNE POST FEBREM 14 MENS. / CUM CONTUMACIA ET MAGNITUDE / SYMPTOMATUM REDICIS FORMIDATAM, / INTERCEPTO MOTU DIMIDII FERE COR/PORIS, NATURA JAM FATISCENTE MEDICIS / CEDENTIBUS, IUNCTIS CUM MATRE / CATHARINA AGNETE PRECIBUS PUNCTO / TEMPORIS PERFECTAM SANITATEM / CONSECUA, SE ITERUM OFFERT. / PHILIPPUS DE CHAMPAIGNE HANC / IMAGINEM TANTI MIRACULI, ET / LAETITIAE SUAE TESTEM / APPOSUIT. / A<sup>[NN]O</sup> 1662”
- (2) *ibid.*, p.145.
- (3) Henri Bremond, *Histoire littéraire du sentiment religieux en France*, IV, Bloud et Gay, Paris, 1920, p.22sq.
- (4) 日本カトリック司教協議会『カトリック教会の教え』カトリック中央協議会、2003、p.174.
- (5) Henrici Denzinger, *Enchiridion symbolorum definitionum et declarationum de rebus fidei et morum*, Verlag Herder, Freiburg, 40.Aufl., 1991, S.528, § 1636: “Principio docet sancta Synodus et aperte ac simpliciter profitetur, in almo sanctae Eucharistiae sacramento post panis et vini consacrationem Dominum nostrum Iesum Christum verum Deum atque hominem vere, realiter ac substantialiter sub specie illarum rerum sensibilibus contineri” 邦訳は『カトリック教会文書資料集改訂版』エンデルレ書店、2002、p.288. 以下、邦訳のあるものは参照したが、本文中の訳文はすべて筆者が原典から訳出した。
- (6) *ibid.*, S.578, § 1821: “Mandat sancta Synodus omnibus episcopis et ceteris docendi munus curamque sustinentibus, ut iuxta catholicae et apostolicae Ecclesiae usum, a primaevis christianae religionis temporibus receptum, sanctorumque Patrum consensionem et sacrarum conciliorum decreta: imprimis de Sanctorum intercessione, invocatione, reliquiarum honore, et legitimo imaginum usu fideles diligenter instruant, docentes eos, Sanctos, una cum Christo regnantes, orationes suas pro hominibus Deo offerre” 邦訳は同書、p.315.
- (7) *Concilio Vaticano II, Costituzione, decreti, dichiarazioni costituzioni, decreta, declarationes*, Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano, 1998, p.75, § 111: “Sancti iuxta traditionem in Ecclesia coluntur, eorumque reliquiae authenticae atque imagines in veneratione habentur” 邦訳は『第二バチカン公会議公文書改訂公式訳』カトリック中央協議会、2013、p.94.
- (8) フランスのカトリック教会では聖書は伝統的にヴルガータ訳が用いられており、現行の日本語訳聖書と異なる箇所もある。ここでは以下の教皇庁校訂版から訳出した。*Nova Vulgata, Bibliorum sacrarum editio*, 2<sup>a</sup>ed. Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano, 1998.
- (9) 聖なる茨の奇跡の経過をたどるうえで、田辺保『パスカル伝』（パスカル著作集別巻Ⅱ、教文館、1984）および塩川徹也『パスカル 奇蹟と表徴』（岩波書店、1985）に学ぶところが大きい。以下の邦訳は、田辺保訳パスカル著作集全7巻と塩川徹也訳『パンセ』岩波文庫全3巻を参照した。

- (10) Blaise Pascal, “Les Provinciales, 1<sup>ère</sup> lettre”, Michel le Guern (éd.), *Pascal, Œuvres complètes*, I, Bibliothèque de la Pléiade, Éditions Gallimard, Paris, 1998, p.593: “Etant tous unis dans le dessein de perdre M. Arnauld, ils se sont avisés de s'accorder de ce terme de *prochain*, que les uns et les autres diraient ensemble, quoiqu'ils l'entendissent diversement, afin de parler un même langage, et que par cette congormité apparente ils pussent former un corps considérable, et composer un plus grand nombre, pour l'opprimer avec assurance”
- (11) André Hallays, *Le pèlerinage de Port-Royal, Essai sur le XVII<sup>e</sup> siècle*, Librairie Perrin, Paris, 1909, p.294: “CHRISTO SOSPITATORI / HANC EFFIGIEM MARGUERITAE PERIER, DECENNIS PUELLAE, CUIUS / SINISTER OCLUS, FAETA ET INSANABILI AEGILOPE IAM TRIENNIUM / LABORANS, VIVIFICAE SPINAE CONTACTU MOMENTO CURATUS EST / DIE MARTII 24<sup>e</sup> ANNO 1565, MEMORES TANTI BENEFICII PARENTES SACRAVERUNT”
- (12) Pascal, “Lettres à Mademoiselle de Roannez, I” , *Œuvres complètes*, II, p.27: “Il s'est fait un miracle depuis votre départ à une religieuse de Pontoise qui sans sortir de son couvent a été guérie d'un mal de tête extraordinaire par une dévotion à la Sainte Épine”
- (13) “Vie de B. Pascal par Gilberte Pascal (Madame Périer)”, M. P. Faugère (éd.), *Lettres, opuscules et mémoires de Madame Périer et de Jacqueline, sœur de Pascal, et de Marguerite Périer, sa nièce*, Auguste Vaton, Paris, 1845, p.18: “Mon frère fut sensiblement touché de cette grâce, qu'il regardait comme faite à lui-même, puisque c'était sur une personne qui, outre sa proximité, était encore sa fille spirituelle dans le baptême; et sa consolation fut extrême de voir que Dieu se manifestait si clairement dans un temps où la foi paraissait comme éteinte dans le cœur de la plupart du monde. La joie qu'il en eut fut si grande, qu'il en était pénétré; de sorte qu'en ayant l'esprit tout occupé, Dieu lui inspira une infinité de pensées admirables sur les miracles, qui lui donnant de nouvelles lumières sur la religion, lui redoublèrent l'amour et le respect qu'il avait toujours eus pour elle”
- (14) “La vie de M. Pascal écrit par Mme Périer, sa sœur, femme de M. Périer, conseiller de la cour des Aides de Clermont”, *Œuvres complètes*, I, p.75: “La joie qu'il en eut fut si grande qu'il en était tout pénétré; et comme son esprit ne s'occupait jamais de rien sans beaucoup de réflexion, il lui vint à l'occasion de ce miracle particulier plusieurs pensées très importantes sur les miracles en général, tant de l'Ancien que du Nouveau Testament. …… j'ajoute seulement, ce qu'il est important de rapporter ici, que toutes les différentes réflexions que mon frère fit sur les miracles lui donnèrent beaucoup de nouvelles lumières sur la religion”
- (15) *ibid.*, p.76: “Et ce fut en cette occasion qu'il se sentit tellement animé contre les athées que, voyant dans les lumières que Dieu lui avait données de quoi les convaincre et les confondre sans ressource, il s'applique à cet ouvrage, dont les parties que l'on a ramassées nous font avoir tant de regret qu'il n'ait pas pu les rassembler lui-même, et, avec tout ce qu'il y aurait pu ajouter encore, en faire un composé d'une beauté achevée”
- (16) Pascal, “Pensées”, *Œuvres complètes*, II, p.765, no.514: “Sur le miracle. Comme Dieu n'a point rendu de famille plus heureuse, qu'il fasse aussi qu'il n'en trouve point de plus reconnaissante”
- (17) *ibid.*, II, p.824, no.680: “Les miracles discernent la doctrine et la doctrine discerne les miracles”
- (18) *ibid.*, II, p.825, no.681: “Ce qui fait qu'on ne croit pas les vrais miracles est le manque de charité”
- (19) *ibid.*, II, p.1543, no.681 variante: “Ce qui fait croire aux vrais miracles est la charité, ce qui fait mécroire les vrais est le manque de charité”
- (20) *ibid.*, II, p.825, no.681: “Fondement de la religion. C'est les miracles”
- (21) Pascal, “Lettre à Mademoiselle de Roannez, IV”, *Œuvres complètes*, II, p.30: “Il y a si peu de personnes à qui Dieu se fasse paraître par ces coups extraordinaires, qu'on doit bien profiter de ces occasions;



puisqu'il ne sort du secret de la nature qui le couvre que pour exciter notre foi à le servir avec d'autant plus d'ardeur que nous le connaissons avec plus de certitude. …… Mais il se cache ordinairement, et se découvre rarement à ceux qu'il veut engager dans son service. Cet étrange secret, dans lequel Dieu s'est retiré, impénétrable à la vue des hommes, est une grande leçon pour nous porter à la solitude loin de la vue des hommes”

- (22) *ibid.*, p.30: “Les afflictions temporelles couvrent les biens éternels où elles conduisent”
- (23) Pascal, “Pensées”, *Œuvres complètes*, II, p.679, no.397: “C'est le cœur qui sent Dieu et non la raison. Voilà ce que c'est que la foi. Dieu sensible au cœur, non la raison”
- (24) Hallays, *op. cit.*, p.293sq.
- (25) Musée national des Granges de Port-Royal, *op. cit.*, p.64.
- (26) Dionysius Areopagita, “De divinis nominibus”, *Patrologia graeca*, III, apud Migne Editorem, Paris, 1857, col.711, cap.IV, § 13: “Est praeterea divinus amor exstaticus, qui non sinit esse suos eos qui sunt amatores, sed eorum quos amat. Atque hoc declarant quidem superiora, quae inferiorum fiunt, per eorumdem providentiam; et quae ejusdem generis sunt, per mutuam cohaerentiam; et inferiora, per diviniorem ad superiora conversionem. Unde divinus Paulus divino isto amore captus, et virtutis exstaticae particeps factus, divino ore ait: *Vivo ego, jam non ego, vivit vero in me Christus*; tanquam verus amator, et qui excessit, ut ipse ait, Deo, et non jam vitam suam, sed amati tanquam vehementer dilectam vivens” 詳細は以下の拙著を参照されたい。『エクスタシーの神学－キリスト教神秘主義の扉をひらく』ちくま新書, 2014, p.70.
- (27) Santa Caterina da Siena, *Il Dialogo della divina provvidenza*, ed. Innocenzo Taurisano, Editorice Ferrari, Roma, 1947, p.531, capitolo CLXVII: “Per tucti quanti questi ed altri infiniti mali e difecti che sonno in me, la tua sapienzia, la tua bontà, la tua clemenzia e il tuo infinito bene non m'ha spregiata. Ho cognosciuta la verità nella tua clemenzia, ho trovato la carità tua e dilectione del proximo. Chi t'ha costretto? Non le mie virtù, ma solo la carità tua”

## Les ex-voto dédiés à l'abbaye de Port-Royal à la louange du miracle de la Sainte-Épine

KIKUCHI Noritaka

### sommaire

L'ancienne abbaye janséniste de Port-Royal à Paris conservait les trois ex-voto pour louer le miracle de la Sainte-Épine, dans laquelle l'on vénérât depuis longtemps cette relique célèbre en tant qu'une partie de la couronne lors de la passion du Christ. Les ex-voto, tableaux peints en remerciement d'un vœu exaucé, représentent des jeunes religieuses qui recouvrent, par la grâce de Dieu, la santé après leurs souffrances des maladies profondes.

L'histoire du premier miracle débute en 1656. Alors que la petite Marguerite Périer, pensionnaire des écoles auxiliaires à l'abbaye de Port-Royal, souffre d'une fistule lacrymal, elle fut conduite à l'adoration de la Sainte-Épine dans la chapelle et guérit immédiatement après avoir touché cette relique miraculeuse. Les jansénistes considèrent qu'il est le signe du soutien de Dieu à leur cause. Cet épisode aurait été le point de départ de la réflexion de Blaise Pascal, oncle maternel de Marguerite, consigné dans ses *Pensées*.

Le deuxième miracle concerne l'œuvre de Philippe de Champaigne, peintre représentant l'art classique du XVII<sup>e</sup> siècle en France. Atteinte d'une paralysie, Catherine de Sainte-Suzanne, fille du peintre, a été guérie en 1662, elle inspire à son père l'une de ses plus belles toiles, l'ex-voto conservé au musée du Louvre. Il se rapproche des Jansélistes et devient l'artiste de Port-Royal où il exécute cette œuvre, dont la scène représente le moment où la mère Catherine Agnès Arnault, abbesse de l'abbaye, a eu la révélation que Dieu va l'exaucer.

Le troisième miracle engendre en 1667 l'ex-voto peint à l'occasion de la guérison de Claude Baudrin dans l'habit de novice. La jeune religieuse de quinze ans a contracté une tumeur abdominale à l'estomac, cause de sa maladie. Les deux portraits votifs, l'un de Claude et l'autre de Marguerite ornaient le chœur de la chapelle de Port-Royal à Paris, puisqu'on peut observer une parfaite symétrie entre ces deux tableaux. Les Jésuites de Paris et l'Église romaine ont donné un coup décisif au compagnon janséniste tandis que la grâce divine continue pendant onze ans après le premier miracle.

**mots clefs:** théologie catholique, France, abbaye de Port-Royal, Blaise Pascal, Philippe de Champaigne